大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

ゲオルク・フォルスターとタヒチ島：思想の原風景として

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-12-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 船越, 克己 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006197

ゲオルク・フォルスターとタヒチ島

――思想の原風景として――

船　越　克　己

1

春先のラインガウをヨットで通り過ぎながら、フォルスターは手にした「ボルネオ旅行記」に読みふけっていた。冬枯れのぶどう畑の眺めはいかにも殺風景であったが、「熱帯の燃えるような色彩と巨大に繁茂した植物」[1]の記述はフォルスターの「空想」を熱くかきたてた。これは1790年3月25日、マインツを出発した旅の第1日目のできごとである。その日はどんよりと曇っていた。この旅行の、すなわちアレクサンダー・フォン・フンボルトと道中をともにした3か月半におよぶ西ヨーロッパ旅行の産物として、フォルスターは通常『ニーダーラインの観察考』[2]と略記される、あの希有の旅行記をものにした。(以下、『観察考』と記す。)『観察考』は主としてフォルスターの旅の『日記』[3]ならびに旅先から妻テレーゼあてにしたためられた書簡を拠り所とする、とされる。しかし、フォルスターはそのほか数多くの参考資料を集め、それを検討し、推敲を重ねて『観察考』を書き上げているのである。[4] 言いかえれば、フォルスターは綿密に構成の計算をしたうえで、一字一句をおろそかにしない文章をつづって、『観察考』を仕上げたのである。

それにしても、『観察考』の冒頭に記される、この「ヤシの地方の常夏」の「夢」の場面は唐突な印象を読む者に与える。もっともここの叙述は、熱帯植物の原色の大きな花とラインガウ地方の寒々としたぶどう畑との対比として読めば、それが自然であろう。フォルスターの目はといえば、すでにぶどうの木とその支柱のつづく灰色がかった風景から転じて、巴旦杏と桃の白や薄赤い花を岩壁にとらえている。まことにファンタジー豊かで、軽快な風景描写である。ヴーテノウは、『観察考』全3部に見られる「コントラストとすばやい転換」がこの作品に精彩を放させている、としたうえで、次のように説く。「つねに新しく生じるコントラストを保証するのは、対象の論じ方、非常に正確に描写するさいにも、忘れることのない軽やかさ、それに決して衰えることのない省察のもつ緊張であろう。」[5] 熱帯地方とラインガウの対比はもちろん、たんなる可視的風景の対比以上の意味をもつ。「熱帯の燃えるような色彩」はその始原性をもって、ドイツ人の「国民的自負」Nationalstolz の顔色をなからしめる。もしそれを比喩的に表現することが許されるならば、つぎのように言ってもよいであろう。すなわち、1790年の旅程地図を鳥瞰図として眺めるとすれば、マインツからビンゲンまでのラインの川面に、幻のような華麗な南洋の大輪が咲いているのが見えるのではないか。あたかも旅人の懐にしまっている護符のように、それは『観察考』の指導原理を暗示しているのではないか。

ジェイムズ・クックの第2回世界周航を終えてのイギリスへの帰還から、フランス革命直後の西ヨーロッパ旅行を終えてのマインツ帰国のあいだには、ちょうど15年の歳月が経過している。20歳のフォルスターは35歳になっていた。弱冠の自然科学者はいまや革命家の道を踏み出そうとしていた。いま

や運命はフォルスターに3年半の余命しか与えていなかった。A.v.フンボルトとともにした旅行から帰った翌日、フォルスターは上司ヨハネス・ミュラーに『観察考』の執筆計画を打ち明けている。何よりもまず、自分が歩きまわった諸国の「見聞記」を出版したい。それらの国は「現在ヨーロッパで最も興味ある国」です、とのべている。(ミュラーあて、1790.7.12.) この「見聞記」、すなわち『観察考』の冒頭部に、いかにも唐突に、それだけに何らかの象徴的な意味あいをこめて、書き添えられたにちがいない「熱帯の燃えるような色彩と巨大に繁茂した植物」という記述は、どのように解釈したらよいのだろう。確かにこの南洋の事物は、ヴーテノウが指摘するように、風景あるいは思索における「コントラスト」の片一方であることはまちがいない。つまり、それは春先のラインの旅とは対照的な旅の事跡としてばかりか、現実の旅の世界とは対照的なファンタジーの世界としても存在する。ただそれだけの話であろうか。じつは、色あざやかな花と巨大な植物のイメージを呼び起こす南洋の世界は、若きフォルスターにとって自然と社会の原型を教示してくれた学校でもあった。それは、G.シュタイナーの言葉を借りれば、いわばフォルスターの「大学」であった。

このように思いをめぐらすならば、『観察考』のはじめに置かれた具象的な南洋のイメージはまさしく『観察考』と対をなす、片一方の著作としての『世界周航記』[6]を暗示している、と解釈することができる。この解釈は何を意図するのであろうか。この二つの書物は、フォルスターの発展、つまり探検家・自然科学者から啓蒙主義的著述家(1780年代)を経て、革命家(1792年10−11月以後)に至る発展を物語る表裏一体の関係にある、とわたしは見たいのである。ただ残念ながら、フォルスターはあまりにも早死にしている。39年と45日ばかりの生涯を駆け抜けている。82歳の誕生日を静かにイルメナウで迎えた、といわれるゲーテの生涯の長さと比較すべくもない。つまり、『世界周航記』と『観察考』ならびに1792年11月以降のフォルスターの著作のあいだの年月は、ゲーテにおける『ヴェルテル』と『タッソー』の間隔だと思えばよい。生涯の長さからしても、フォルスターはゲーテではなかった。

このごく当たりまえの事実を前提として、あらためて『世界周航記』を読むと、『世界周航記』から『観察考』までの距離はそんなに大きいものではない、と気づき、青年と晩年のフォルスターの距離を無思慮にも拡大しすぎていた非合理を悟らされたしだいである。そして、フォルスターが友人フォスに書いた弁明の裏にひそんでいるかもしれぬ意味も、おぼろげながらわかってきた。「わたしの諸原則は10月21日以前に周知のことでした。わたしの著作がその諸原則をはっきり示しています。それ以後わたしがなしたことは、つぎの事実を証明するにとどまります。すなわち、わたしは自分が思索していたとおりに、行動することができた、と。」(フォスあて、1793.1.29.) むろんここでのべられているのは、マインツ革命にかかわった経過に対する、フォルスターの釈明である。しかし、革命家フォルスターの「思索」の内実は『世界周航記』において展開される自然科学者(あるいは博物学者と呼ぶこともできるだろう)フォルスターの世界像と深いところで結ばれている、と思われる。『世界周航記』は『観察考』ならびにそれ以後の著作とはまったく異質な、たんなる探検記ではない。ただし、『世界周航記』にあっては、フォルスターのオリジナリティーの問題がつきまとう。すなわち、フォルスターは『世界周航記』を執筆するにあたり、さまざまな資料の恩恵をこうむっているのである。たとえば、父ラインホルト・フォルスターの記録文書、クックの「報告」、さらにはリンネの使徒の一人、スウェーデンの博物学者アンデルス・スパルマン(1748−1820)との「語らい」[7]、それに

みずから翻訳したブーガンヴィルの『世界周航記』などである。ゲオルク・フォルスターがラインホルト・フォルスターやクックと行動をともにすることも、まれではなかったことから、かれらの記録と『世界周航記』の記述が同一の対象にふれることは、むしろ当然である。したがって、『世界周航記』のオリジナリティーについては、その辺も考慮すべきである。

フォルスターのコスモポリタン的知識の集積は、たとえばぼう大な翻訳（それはわたしの想像のおよばぬ大仕事である)、『発見者クック』、『アメリカ北西海岸と毛皮貿易』、『アメリカ北部の予備記述』など翻訳者・編者としての啓発的な「序文」、多彩な書評、イギリス文学・芸術に関する論述によっても証明される。他方、革命家フォルスターに至る発展の記念碑として、『観察考』、『パリ素描』、それに加えて『世界周航記』を挙げることができる。このフォルスターの３つの代表的著作のうち、いうまでもなく『世界周航記』がいちばん早い時期に書かれている。のみならず、それはフォルスターの著作のなかで最も初期の作品、いわゆる処女作である。本論は『世界周航記』におけるタヒチ島滞在の記述の部分を考察することによって、『観察考』、『パリ素描』へ連なる『世界周航記』そのものの位置ないし意義を確かめる試みである。

2

クックは1773年８月18日の午前中に、オアイティ＝ペハ湾（ヴァイテピハ湾とも表記される）にアドヴェンチャー号とレゾリューション号の錨をおろさせた。クックは第２回世界周航のさい、タヒチに２度寄港している。第１回目は1773年の８月で（期間２週間)、第２回目は1774年の４月から５月にかけてである（３週間)。『世界周航記』にはそれぞれの滞在体験がつづられている。

フォルスターがレゾリューション号から見たタヒチ島の夜明がたの光景は、それはすばらしかった。いまだかつて、いかなる「詩人」も言葉によってタヒチの「朝」の情景を、これほどまでに「美しく」描いた者はいない、とフォルスターはタヒチの章の冒頭にいう。

> ある朝のことであった。ぼくたちは２マイル先にタヒチ島を見たのである。その光景をもっと美しく記述した詩人はまずいないだろう。これまでぼくたちに同伴してくれていた東風はやんでいた。陸地から吹く微風は、こよなくさわやかで華やいだ芳香をぼくたちの方に運び、海面にはさざ波を立たせていた。森をいだく山々はそれぞれに荘厳な形をした、誇らしげな峰を屹立させ、すでに曙光をあびて赤々と輝いていた。それらの峰の下方には、やや低い、なだらかに傾斜する丘のならびが認められた。そうした丘も、山と同じように、森でおおわれ、さまざまな優雅な緑色と秋らしい褐色で濃淡をつけていた。丘陵地帯の前方には平地が広がっていた。そこには実のなるパンの木と無数のヤシが影を一面に落としていた。ヤシの威厳あるこずえはパンの木のはるか上方にそびえていた。[8)]

やがてタヒチの人たちがバナナの若枝をふりかざしながら、大声で「タイヨ」(Tayo！）と何度も叫んでいる。クックたちを迎える、かれらのあいさつの仕方であった。フォルスターはタヒチ島の自然の豊かさと島民のくったくのない、開放的な性格をこのように描写している。それはタヒチに対す

るフォルスターの変わらぬ印象であった。1774年5月、最終的にこの島を去るフォルスターは、つぎのように記している。「かれらが住んでいる土地は、自然が美しい風景をあちこちに惜しみなく与えた土地である。大気はつねに暖かいが、さわやかな潮風によって絶えず適度に保たれる。空はほとんどつねに晴れている。そのような気候と健康によい果物は、住民に肉体の力強さと美しさをもたらす。[9]」フォルスターの記述にあっては、観察と考察が明敏に結合されている。

フォルスターがタヒチをはじめて見たときの、さきほどの引用部分にかかわるC.M.ヴィーラントの所感は興味深い。「ある朝のことであった！（と、フォルスター氏はかなり高い調子で歌う）」とのコメントを挿入し、ヴィーラントはつぎのように注釈している。「（当時はまだ非常にお若い方 ein sehr junger Mann であった）フォルスター氏はかれの詩人たちでいまだ飽和状態にあった。だからこの行文を書きなぐったとき、おそらくつぎのことは考慮しなかったのであろう。すなわち、かれの詩人たちは、ここで氏に与えられたそのような朝をじっさいに見れたら幸せだ、と思ったであろうことを――さらに、想像力はそのようなことがらにあっては、つねに自然以下の領域にとどまっていることを。[10]」ヴィーラントは、フォルスターの美しいタヒチの朝焼けの描写を皮肉たっぷりに評している。なぜヴィーラントはこれほどまでに『世界周航記』を酷評するのであろうか。ヴィーラントの言によれば、フォルスターの旅行記の内容が「ブーガンヴィル」と「キャプテン・クックの第1回世界周航の記述者［ジョン・ホークスワースであろう－筆者］」による詳細な「報告」のくり返しにすぎないからである。それでもヴィーラントが『世界周航記』第1巻の抜粋にみずからの注釈をつけて世に紹介するには、それなりの理由があったはずである。たとえば、「たくさんの小アネクドーテ」ならびに「人類の幼年期」を再現して見せてくれるタヒチ人の「個性的特性[11]」が「おもしろく、貴重である」unterhaltend und schätzbar からだ。それにしても、「タイヨ」と、たがいに叫びながらあいさつを交わす場面をヴィーラントが、お節介やきのフランスの家政婦がドイツのかわいい2歳半の女の子をあやしているようでぞっとする[12]、と形容するのは、『世界周航記』受容史における1つのエピソードというべきであろうか。すなわち、フォルスターは何といっても「博物標本研究者、採集者」であり、「人間」を研究し、その現実の「生活」を描く力量はなかった、とヴィーラントは断定するのである。一介の探検家がものにした旅行記など、18世紀の文人作家の眼識にかなわなかった、ということであろう。この「啓蒙された精神」を備えた青年は「情熱と感激」をこめて「語る」spricht が、「書く」Schreiben ための力は不足している、とヴィーラントは言いたげである。

なるほどヴィーラントはフォルスターの「観察」、「比較」、「推論[13]」の仕方を卓越したものと認めつつも、フォルスターの著作を多数の「目新しく、不思議なもの、驚くべき、恐ろしいもの、美しく、優雅なもの」を一つの連続にまとめた「旅行記」Reisebeschreibung にすぎない、と言いたげである。いやむしろ、ヴィーラントはヨーロッパの2、3歳、せいぜい5、6歳の子供の心しかもたぬタヒチの大人の心理状態をどう考えてよいのか、いささか当惑しているのである。船員たちのきげんがよいと見れば、ガラス玉首飾りを無心するタヒチ人である。かれらは、船員たちがどんな態度を示そうが、あの「陽気で好意的」な態度をついぞ変えなかった事実をどう考えてよいのか、ヴィーラントにはわからなかった。どんなに「道徳を学んだ」ヨーロッパ人の態度ともちがう態度であるがゆえに。[14]

『世界周航記』に記述された、他者たるタヒチ人の生活習慣をヴィーラントに理解させるには、ひとりのディドロが必要であったのかもしれない。「善良な従軍牧師がフランスでは修道士、タヒチで

は未開人でいる[15]」ことの理を説く『ブーガンヴィル航海記補遺』の作者が。だが問題はこれにとどまらない。E. W. サイードはその著『オリエンタリズム』(1978) において、近代オリエンタリズムが拠って立つ4つの要素をつぎのように数えている。すなわち、①地域の拡大（たとえばクックやブーガンヴィル)、②エキゾチックなものに対する知的な態度の助長（オリエントの文献資料を直接取り扱う態度)、③歴史的共感（ヘルダーの多元的歴史意識)、④自然と人間を類型に分類する衝動（リンネやビュフォン）である。これらの「一八世紀的思想の諸潮流」がなければ、近代の「オリエンタリズムは出現しえなかったであろう[16]」、とサイードは指摘する。フォルスターの『世界周航記』がかかわるのは、なかんずく①であることは明瞭である。周知のように、サイードはオリエンタリズムを「オリエントを支配し再構成し威圧するための西洋の様式(スタイル)[17]」であると規定する。ならば、『世界周航記』は、近代オリエンタリズムを準備した「言説(ディスクール)」、すなわち「生(なま)の政治権力と直接の対応関係にはなく、むしろ多種多様な権力との不均衡な交換過程のなかで生産され、またその過程のうちに存在する[18]」言説(ディスクール)を含むテクストとして理解されうるのであろうか。

それを考察する方向は本論になじまない。ただ言えることは、クックのタヒチ探検旅行においてまたもや西洋人がタヒチ人に新しく出会った、ということだ。その出会いはときとして珍奇な事象をひき起こしている。クックに同行した画家は古代ギリシア風に島の男女をスケッチした。島人は好奇心からであろうが、若い娘を使って陸へおびき寄せた船員の身体をくまなく調べたりした。しかしこの島にはまぎれもなく一つの社会が成立していた。フォルスターはタヒチ社会の観察に第一義を置く。そしてこの社会を構成する島人の生活（衣食住、風習、文化）がかれの視野をとらえて離さない。また鳥類や植物の採集のために遠出したさいには、絵のように美しい「ロマンチックな」タヒチの自然に出会うこともまれではなかった。しかし、フォルスターはタヒチのエキゾチズムに酔いしれる、19世紀以降の大衆観光旅行の時代の子ではなかった。A. v. フンボルトはかれの「教師であり、友人」であったゲオルク・フォルスターについて、つぎのように記し、その探検旅行の意義を称えている。「かれによって学術旅行の新しい時代がはじまった。それは比較民族学と比較地理学を目的とする。ゲオルク・フォルスターは繊細な美的感覚に恵まれていた。そのかれは、タヒチとそのほかの、当時はいまよりずっと幸せだった南洋の島々で一人の男のファンタジーを（ごく最近ではチャールズ・ダーウィンのそれを）満たした、生命あふるる数かずの光景を心にとどめながら、移り変わる植生の段階、気候状況それに食物を、人間のもとの居住地ならびに血統におうじて相違する、かれらの礼儀との関連のうちに叙述した。エキゾチックな自然の光景のなかに認められる真実、個性、具象性のすべては、かれの著作のなかに結合している。[19]」フンボルトによれば、新しい時代は学術的旅行者に「世界観の広大さ」die Größe der Weltansicht と「具象的描写のための zu anschaulichen Darstellungen 言語」を使いこなす能力を要請した。すなわち、学術的自然研究は「観察者の描写能力」、「自然を記述する要素に対する生命の付与」、「見解の多様性」によって刺激を受け、発展するのである。われわれはこのフンボルトの主張のうちに、いわゆる「言説的なもの」から「図像的なもの[20]」へ移行する言語現象の変化を認めざるをえない。それは単独の理念の崩壊する時代の自己告白ではなかったか。

リンネ (1707−78) は自然をその全体性のうちに説明しようとした博物学者として有名である。リンネの使徒の一人、ペール・カルム (1716−79) について、ユーバーシュラークはつぎのように記している。「カルムの手記の思想史的意義はその独創性ではなく、かれの時代のアカデミックな研究に

対して、典型的かつ代表的影響を与える特異性のうちにある。18世紀の学術世界全体は周知のように、一つの『精神的な共和国』を形成していた。この共和国は国家的制約を考慮することなしに、共通の諸問題に取り組んでいたし、一つの共通の理想を追求していた。[21] しかしである。じつは18世紀後半に入ると、ポスト・リンネの時代が色を濃くする。『リンネとその使徒たち』を著した西村三郎氏によれば、新時代の博物学者たちにとって「博物標本は、そのなかに神慮を読みとるべき美しくも尊い造化物などではなく、いわば自然のなかに存在する単なる<個物>にしかすぎない。[22] この意味では、フォルスターはいわば過ぎ去る時代に踏みとどまる博物学者たちの意識を共有しているかのように見える。1772年10月29日、レゾリューション号はアフリカの南端、喜望峰に向かっていた。その夜、海上になぞめいた光が目撃された。その光景をフォルスターはつぎのようにつづっている。

> 見渡すかぎり、海全体は炎につつまれているようであった。砕け散る波はすべて尖端で明るいきらめきに照らされていた。それは燐光にも似ていた。[...] このふしぎな現象をもっとくわしく調べるために、そのような光る海水のはいった手桶を甲板にもってこさせた。[...] ぼくが手で水をかきまぜると、明るい小物体の一つが手にくっついていた。こうなったのを幸いと、ぼくは改良型ラムズデン顕微鏡の通常レンズでそれを調べた。そこに見えたのは、形は球形で、褐色がかり、ゼリーのように透明な物体であった。最強のレンズを使うと、この微細な物体に小さく開いた口を発見した。その体内には四、五個の腸嚢があり、それらはたがいにつながり、例の口と結びついていた。
> この現象のうちにはいかにも奇妙だが、偉大なものがあったので、全能をもってこの光景を作りだした創造者を、畏敬に満ちた驚きの気持ちで考えないわけにはいかなかった。[23]

この記述からして、フォルスターが、「ちっぽけな動物」にみずから運動し、輝く「能力」を授けた「創造主」に畏怖の念をおぼえたのは、まちがいないであろう。こういう表現が許されるならば、17歳の青年のこの感動のなかにリンネとその使徒たちの神への畏敬の痕跡がうかがえる、といえないだろうか。ちなみに世界周航から帰って50日たつと、フォルスターはベルリンの友人シュペーナーにゲーテの『若きヴェールターの悩み』(1774)を送ってくれるよう依頼している。(シュペーナーあて、1775.9.19.) 夜光虫の一件については、クックもその『航海日誌』にごく簡単に(テクストで13行)記している。[24] その部分を要約しておく。――光る海の光景はよく見られるが、その原因はそれほど一般には知られていない。バンクスとソランダーの意見によれば、それは海の虫(sea Insects)によってひき起こされるという。しかしフォルスター[索引によると、父ラインホルトを指す―筆者]はかれらの意見に納得しなかったので、クックは手桶に何杯か海水をくんで調べた。フォルスターの任務領域はこの生物を詳細に記述することにあったが、やっと海の光の原因に満足した。――クックの記述はきわめて簡略である。海を熟知する航海者にとって夜光虫の存在はたいしてめずらしくないのであろうか。光る海と夜光虫の事件はラインホルト・フォルスターの日誌にも書きつけられた。それはあらかたゲオルク・フォルスターの記述に近い。この部分は『世界周航記』とラインホルトの『レゾリューション号日誌』の関係を明瞭にしめしている。それはともかく、ラインホルトはつぎのようにのべている。報告は「正確にきちんと」書かねばならぬが、みずから光り輝く「小動物」を見て、か

れは「畏敬の念」awe を禁じえなかった、と。[25]

ゲオルクの記述とクック、ラインホルトそれぞれの日誌との関係は『世界周航記』の英語版とドイツ語版の「序言」Preface, Vorrede においてふれられている。ゲオルク・フォルスターはだれにも拘束されずに『世界周航記』を執筆することができた。それゆえ、執筆にさいして、父ラインホルトの『レゾリューション号日誌』を調べて、当時の「事実」を確認することには、何ら不都合はなかった。[26] 他方、クックの『航海日誌』もときに引用し、ドイツの読者のために「もっとも重要な」個所を提供した。それはゲオルクが目撃していない事件か、あるいはクックとは見方を異にする事件か、そのどちらかである、と断っている。[27] とくに後者に関して、「船員」にとって「日常的で、注目に値せぬ」ことでも、「陸の人間」にとっては「目新しく、おもしろい」ことがしばしばある、[28] としている。夜光虫の事件などはその最たる例証というべきであろう。

時代の探検家、博物学者は全世界から「事実」を発見し、収集した。「それにもかかわらず、知識は増大しなかった。」[29] and yet knowledge was not increased. それはぼう大な事実がばらばらに提供されたからである。おまけに旅行者は「同一の対象を同じ方法で」みることは、まずしない。だからこそ、ゲオルク・フォルスターにとって「観察者」the observer, der Beobachter という問題がクローズアップしてくる。フォルスターは徹底して「人間の本性」the nature of the human mind, die Natur des Menschen を観察しようと試みる。それは英語版の「序言」にいう「神から人間へ至る道」the ways of God to man（アレグザンダー・ポープの『人間論』より）、ドイツ語版の「序言」にいう「摂理の道」die Wege der Vorsehung を読者に伝えるためである。ダンツィヒ時代にリンネの著作に影響を受けたラインホルト・フォルスターは広義の「リンネの使徒」であった。リンネとの間柄は世界周航から帰ると、それをリンネに報告するほどであった。幼いころ、父ラインホルトからリンネの植物分類法を教わったゲオルクであれば、「リンネの使徒」たちと同じように、創造者の「摂理」に対する特別な思いを抱くのも当然のなりゆきであろう。そのかぎりで、ここで言われる「観察者」observer とは、ジョナサン・クレーリーの定義を借りれば、「予め定められた可能性の集合の枠内で見る者」、「さまざまな約束事（コンヴェンション）や限界のシステムに埋め込まれた存在」[30] なのである。

フォルスターはその最後の傑作ともいうべき『パリ素描』において、「革命」を「摂理のなせるわざ」[31] Werk der Vorsehung とした。マインツ革命の実践者の時期（1792年の秋から1793年の春）をへて、ふたたびパリで観察者となるフォルスターは、社会のいかなる変革を「摂理」とみなしているのであろうか。ここでフォルスターがいう「摂理」とは、硬直した一つの普遍性のイデーではない。それは、すでに『観察考』で指摘されているように、「もっと多様な偏差」[32] を、換言すれば、決して一致点に収斂しない、自然の生命力の躍動を意味している。フォルスターの革命理念としての、かかる「摂理」をかれはタヒチでどのようにみずからの視野に収めているのであろうか。『世界周航記』は「価値の高い、時代批評的な内容ならびに進歩を指示する理念をもつ、画期的作品である」[33] とは、G. シュタイナーの評価である。すなわち、「ゲオルク・フォルスターの他のすべての著作から数多くの糸が、そこへもどって行く作品である。」

3

「錨泊中ずっと、わたしたちは可能なかぎり上陸し、できるかぎり多くの植物を採集するよう心がけた。しかしわたしたちが発見したのは全部で40種類であり、そのうち16種類は新種であったが、残りは既知のものであった。リンネのなかに見つけた、いくらかの種類に関する記述はわたしたちの標本によって修正した。[34]」これはヴァイテピハ湾に停泊中にラインホルト・フォルスターが英文でつづった『レゾリューション号日誌』の一節である。これを読めば、ラインホルトはいかにも植物調査に没頭する博物学者のような印象を受けるが、タヒチ島がかれにとっても「幸福な島」であることに変わりはなかった。「気持ちよい、木陰の多い農園、快い散策、すばらしい小川、強い太陽、成長の早い草木、とてもおいしく、健康によい食べ物、絶えず吹いて、大気を冷やす快い微風、日の出と日没時の美しい、熱帯の空、そのほかすべての環境がその住民の幸福の一因となっている。[35]」ラインホルトは楽園のような晴れやかな風景を、ウェルギリウスの『アエネーイス』の詩句（第6巻638－644行、656－659行）をもって、読者の心に刻印づけようとする。そのはじめの部分を意訳しておこう。アエネーアースが巫女シビュルラとともに楽園の手前の土地に到着した場面である。「かれらは歓喜の土地へと、祝福された杜のすばらしい緑がしたたる場所へと、天国に召された人たちのいるところへと、やってきた。エーテルは深紅色の衣で、この原野を包む。」ここに訳出した詩句を、ゲオルク・フォルスターは『世界周航記』第8章、すなわちタヒチ島滞在の叙述の冒頭に、モットーとして掲げている。そればかりか、このモットーにつづく「ある朝のことであった」にはじまる、さきに引用した数行は、上に引用した父ラインホルトの『レゾリューション号日誌』の部分（「気持ちよい、木陰の多い…」）を書き換えたものである、との印象をぬぐえないであろう。ならば、『世界周航記』の「序言」にも言及されているように、『レゾリューション号日誌』と『世界周航記』が同じ対象を扱うケースの一例として、「火山」の叙述を挙げてみて、二人の記述の特徴にふれてみたい。

まずラインホルトの記述からはじめる。「高くそびえ立つが、同時に岩の多い丘陵が通常、この島の中央部を占める。諸君はそこにはっきりといくらかの尖塔と高くそびえ立つとがった岩を認めるであろう。それは火山の産物である。近づくほどに、鉄の分子のつまった黒い砂、われわれのヨーロッパの熔岩に似た、はちの巣状の黒い石を発見するであろう。要するにすべては、この島が激しい火山爆発と地震の産物であることの証左となり、眺めるひとの心を荘重な畏敬の念で打つ。[36]」この終わりの部分は、ラインホルトの観察が必ずしもつねに即物的に語られているわけではない、ことを示す。さらにラインホルト・フォルスターの記述はつづく。「礁によって囲まれ、低い地峡で結ばれている、2つの丸みをおびた大塊がこの幸福な島を形づくる。山麓は栽培地となっている。パンの木は高くそびえ、大きな美しいぎざぎざの葉と大きな緑がかった実をつけている。それらのあいだに、たくさんの生食用バナナと料理用バナナが植えられている。紫色の食用アルムとか、つやのある葉をつけた大きなアルムが一面に植えられている1区画の土地が、ところどころにある。いたるところにディオスコレア・アラタ、すなわちさつまいもが生えており、木や灌木に絡まっている。ときどき諸君は大きなりんごの木を見るだろう。その葉はくるみの木の葉に似ている。あるいは暗緑色で、つやのある大きな葉をつけた木を見るだろう。薄緑だが、いくぶん赤色の果実、それに赤い花がそれらのあいだに

混じっていた。かれらの族長たちの家屋の近くには普通、ジャスミン Cape Jasmin あるいはクチナシ Gardenia florida の灌木が植えてある。わたしはその実をいっしょうけんめい探してみたが、ついぞそれを見つけたことはない。」いささか長文の紹介になったが、ラインホルト・フォルスターの植物観察の確かさ、その描写の華麗さをいくぶんか味わうことができるだろう。

これに対応するゲオルクの叙述はつぎのようになっている。

> かなりの高さがある山頂の、見慣れた裂け目とひどく乱れた形状は見たところ、かつての地震に由来する。山々は部分的には熔岩からできており、また住民はそれでさまざまな道具を作る。しかし熔岩はさらに、その昔この島には火山があったにちがいないことを、われわれに確信させた。平地の肥沃な土壌も、まさしくこのことを実証する。それはじつに肥えた培養土からでき、火山の噴出物の残滓と混ざり合っている。しばしば山麓で見つかる、鉄を含む黒い砂も、同じくそれを実証する。[37]

ゲオルクはタヒチの火山につづく、父の植物に関する記述をカットしている。それに代わって、ホークスワースの著作にはウォリス船長がタヒチで卵大の硝石を発見したとあるが、「ぼくは事の正しさそのものを疑わざるをえない」[強調—筆者]、とのべるにとどまる。「現在までまだ純粋な硝石が塊で発見されてないからである。」フォルスターたちはタヒチ島でまだ硝石の塊を発見していないから、ウォリス船長の話はあやしい、と推量する。アカデミー版の注釈によれば、ゲオルクの推察が正しいという。経験に重点を置くゲオルクの面目躍如というべきか、それとも偶然の産物かは、さておくとして、ゲオルクの実証的精神をかいま見せるところである。ラインホルト・フォルスターとゲオルクの双方を比較して、全体としていえることは、ゲオルクはみずから「目撃していない」事がらは体験として取り上げていない。それをあたかも自分が眼前に見たかのように書くことはしていない。父の記述にあるエキゾチックな植物の場面は、それがいかに魅力的であろうとも、黙殺しているのである。

『世界周航記』の刊行後、それが20歳にも満たぬ一青年によって執筆されたことを否定する批判的人物も現れて、[38]『世界周航記』の執筆者をめぐる論争もかまびすしい時期があった。それではゲオルク・フォルスター独自の体験の記述はどんなものか。それも興味深いものである。なぜならば、その体験はかれ以外、おそらくだれも書くことはないからである。以下に、ゲオルクがスパルマン博士と植物採集に行ったときの記述を抜粋する。

> わたしたちはオ・パレの最前方の谷の一つに入って行った。ここで幸運の女神は寵愛のしるしとして、わたしたちに植物学上の発見をさせてくれた。すなわち、わたしたちは新たな木を一本見つけたのである。世にもめずらしい華麗な木であった。たくさんの花を咲かせ、まばゆいばかりに輝いていた。その花はユリのように白かったが、それより大きく、多くの花糸をつけていた。花糸の先は華やかな深紅色であった。すでにその多くが落ち、地面は一面その花におおわれていた。この美しい花をわたしたちはバリングトニアと呼んだが、現地語ではフッドゥ（フッドー）といい、住民たちが口ぐちに教えてくれたところによると、こうである。すなわち、そのクルミのような実をつぶして、貝の肉と混ぜ、海に投げこむと、魚はそれによってし

ばらくのあいだ麻痺させられる。その魚が水面に浮かんでくると、手でつかめる、というのである。回帰線のあいだの、さまざまな海生植物がまさしくこの属性をもっているのは、奇妙である。そのようなものとして、特にクッケル粒 Kuckels-Körner (cocculi-indici) がある。それは東インドで知られ、同じ目的のために使用される。[39]

上記の文章には、忠実に観察を記録しようとするゲオルク・フォルスターの意図がうかがえる。バリングトリアの花は非常に美しい、と想像できるが、ゲオルクはその花を見たときの印象を即物的につづっている。視覚がとらえたままにその場面はつづられる。しかし、そこにわれわれは後年のフォルスターの文筆のふしぎな魅力の萌芽を認めることができる。それは、ヴーテノウの言葉を借りれば、「読者を刺激して、みずから思索するようにうながす」[40] 文章の力である。フォルスターは「読者を対話の相手」とし、読者が「判断を形成する過程」をともにするのである。フォルスターの文章のもつ挑発力をさりげなく表出させる文章といわねばならない。楽園を思わせる美しい花とともに暮らす住民の生命を支える、こと食生活にかかわる叙述である。同じ精神をもって、ゲオルク・フォルスターはつぎのような文章をものにしている。ゲオルクその人の文章と受け取ってよいのではないか。

植物界にあっては、ともかくここは植物学にとってのみ好ましくないようにみえたが、ほかのあらゆる点ではそれだけ好都合にみえた。自然研究者ならば大量に発見したいと願う、野生植物は、以前にも言ったが、ほんのわずかしかなかった。それに対して、食用の植物や果実はそれだけ多かった。たとえば、ヤマイモ、食用根 (eddoes)、タヒチりんご、バナナ、パンの実である。[41]

しかし、青年ゲオルクを囲んでいたのはタヒチの自然とその住民だけではなかった。かれはつねにクックをはじめとする乗組員たちと生活をともにしていた。かれらの語る言葉、かれらとの対話からも、ゲオルクは多くの知識を身につけたはずである。「熱帯の果実を常食とする生活は非常に簡単で、安価である。2、3本のココやしの木、数本のパンの木、2、3ヤードの土地に生食用バナナ、料理用バナナ、食用根、ヤマイモ、にがいポテトがあれば、一家族を養うことができる。」[42] このようにラインホルト・フォルスターが『レゾリューション号日誌』に書けば、ゲオルクは『世界周航記』につぎのようにつづった。「肥沃な土地と恵まれた気候は、多くの種類の栄養ある植物をひとりで育て上げる。だから住民たちはこの点においては何の支障もない、心配のいらない至福をあてにすることができる。」[43] また同行していた画家ウィリアム・ホッジスのスケッチ画法からゲオルクは少なからぬ恩恵をこうむった。二人の「共同作業」がしばしば成立したのである。[44]「タヒチの蓮っ葉」は「教養あるヨーロッパの娼婦」ほど自堕落な女ではないとか、「人間の本性」は不完全なものだから、これほど「善良で、無邪気で、幸福な国民」であっても、かくも「堕落」し、かくも「不品行」に身を落とすのか、[45] などの嘆きはゲオルクだけの嘆きではなかったはずである。

4

フォルスター父子の参加した世界周航の成功は船長クックの功績に帰するところが大きい。かれの航海技術の確かさ、下級船員と同じ質素な食事をともにするクックの配慮、人柄などがあって、世界周航は無事にはたされたわけである。しかしゲオルク・フォルスターの『世界周航記』に関していえば、クックの思想がゲオルクに多大の影響をおよぼしていることを見逃してはならないであろう。この方面におけるクックの業績について、フォルスターはつぎのようにのべている。「そこにはかれが知らぬ制度があった。かれが苦笑したり、忌みきらった偏見があった。クックはそれらに愛着を感じることはなかったにしろ、彼が見たこと、経験したことを忠実に描写する、かれの確固たる立場は変わることはなかった。クックの旅行記の内容を要約すれば、つぎのことが書かれているといえよう。すなわち、人類は何とさまざまな形成段階にあることか。さらに、大地の全表面にはさまざまな必要におうじて修正される幸福な状態の何と多くの基本的条件が存在することか。さらに、自然がその状態のために何を差し出しているのか、そしてその状態はそれじたいの存在の隠れた深みから、何を汲み取らねばならぬかである。そして最後に、道徳的で理性的な人間がその非常に豊富な組織力、判断力を傾注し、その享受をそれらの無制限の活動にまかすとき、どれほど偉大な仕事がなしとげられるか、である。[46]」この『発見者クック』(1787) の一節はいかに『世界周航記』の文体と内容にクック船長がかかわっているかを暗示するものである。ゲオルクにとってクックは得がたい教育者であった。

ゲオルク・フォルスターが「ヨーロッパの植民地主義」(ヴーテノウ) の時代にあって、いかに啓蒙主義の精神、ヒューマニズムの精神をクックと共有していたかを知るために、3点にしぼって、クックの『航海日誌』と『世界周航記』を眺めてみよう。1つはタヒチ人の身分と身体の特徴、2つ目はヨーロッパ人による南洋の破壊、3つ目はカニバリズムに関する記述である。

1. 彼らの体躯について言うと、男は一般に背が高く、がっしりとした四肢をもち、かっこうもよい。いちばん高い男では、6フィート3インチ半の身長の者を見たことがある。高貴な女性は、あらゆる点でヨーロッパ人と同じくらいの大きさだが、下じもの女性となると、小さいのがふつうである。これは、彼女らが、高貴な女性たちより若い年齢で性愛にふけるからであろう。肌の色はさまざまである。下層の者たちは、どうしても太陽と大気にさらされることが多いから、ひじょうに濃い褐色の肌をしている。上流の者たちは、家のなかや日蔭ですごす時間が長いから、西インドで生まれそこに長く住んだ人々よりも薄い褐色の肌であり、女性のなかにはヨーロッパ人と同じくらい白い者がいくらかいる。[47] (クック)

下層民はそれ［労働—筆者］によってぶかっこうになるだろうし、かれらの骨格は虚弱になるだろう。灼熱の太陽のもとに、もっと長くいなくてはならぬから、かれらの肌は黒くなるだろう。かれらの娘たちは土地の貴族とたびたび、幼いころから淫乱を重ねるので、かれらはしまいには矮小な、背の低い姿に退化するだろう。他方、あの高貴な怠け者は体格も大きく、美しい外形をし、白い肌をもつ。かれらはこの長所を自分たちだけで維持するだろう。なぜならば、

かれらだけが貪欲な食欲を無制限に欲しいままにし、心配のいらぬ無為の生活をつねに送ることができるからである。[48]（ゲオルク・フォルスター）

ここでクックの『航海日誌』が語るのは、エンデヴァー号による第1回目の世界周航（1768−71）のさいに立ち寄ったタヒチである。『世界周航記』の英語版「序言」には、つぎのようにのべられている。「キャプテン・クックの第1回世界周航の物語はヨーロッパのあらゆる国民によって、熱心に読まれた。[49]」フォルスターはホークスワースの編んだ『物語』An Account of a Voyage round the World, in the years 1768, 1769, 1770 and 1771 by Lieutenant James Cook, Commander of his Majesty's Bark the Endeavour の内容にも言及しているところから、上に引用したクックの記述は読んだものと思われる。ホークスワースはクックの『航海日誌』を『物語』に採っているからである。[50]

2．　ヨーロッパ人との交渉はこのような結果を生んでいる。文明化したキリスト教徒であるわれわれにとってさらに恥ずかしいことは、われわれが彼らの風紀を堕落させて悪に染まりやすいように、彼らの間に欲と、そしておそらく病を持ちこんだことである。こうしたものは、以前まったく知られず、彼らが父祖の時代から享受してきた幸福な静寂を破壊する役しか果さない。[51]（クック）

ほんとうにまじめに願うものだが、ここで何も知らずに素朴なまま、幸福に生活を営んでいる無邪気な人びとに、文明化された諸国民の堕落した風俗が伝染するまえに、ヨーロッパ人と南洋諸島の住民との交際が早めに断絶して欲しいものである。[52]（ゲオルク・フォルスター）

これはニュージーランドのクックの、タヒチのフォルスターの、それぞれの体験に基づく考察である。ヴーテノウの言葉を借りれば、クックは「フォルスターと同じように（強調—筆者）、ヨーロッパ人が原住民の道徳を堕落させていることを、見抜いている。[53]」フォルスターは、しばしばクックと同じような観点から、南洋の住民を考察していることは否定できない事実である。

3つ目の例を挙げるならば、カニバリズムに対するクックの考えである。ニュージーランド人のような「宗教原理がまったく欠けている」民族では人食いは普通よくみられる、とクックは書いている。それはかれらが「安定した形態の統治」をもたぬからであり、もっと大きな統治単位ができれば、「敵」も少なくなり、「文明化」も進み、「この習慣はおそらく忘れられるであろう。[54]」フォルスターはクックと同じ意見をのべているわけではないが、カニバリズムを歴史的に考察する点ではクックの思考を継承するものである。

ゲオルク・フォルスターとクックの関係、すなわち南洋の住民に対する観察という点における関係は、クラウス＝ゲオルク・ポップによって明瞭に定式化されている、とわたしは考える。『発見者クック』の「あとがき」でポップはつぎのようにのべている。「フォルスターのクック小論は、著者が自

然科学的な関心から歴史哲学的、社会政治的な関心への移行を証言する、かれの発展における重要な位置を占めるだけではない。クック小論は、1789年の大革命まえのヨーロッパ啓蒙主義哲学の最終段階の、力強い証言の記録でもあるのだ。[55]」

第1回目のタヒチ訪問を終えるにさいし、ゲオルク・フォルスターはタヒチ社会に「専制主義」Despotismus が強固になりはせぬか、と憂慮する。他方、「傷つけられた人間の諸権利に対して抱く感情」は「一つの革命[56]」をひき起こす誘因ともなろう、と予感する。おそらくここでいう「革命」は、タヒチ再訪のときフォルスターが認識した「アジアの専制的諸国家[57]」でしばしば起こる「革命」、つまり支配者どうしの争いに起因する統治者の交代ほどの意味しかもたないかもしれない。しかし、専制主義に抗する民衆の反抗をじゅうぶん念頭におくフォルスターにあっては、革命という用語は啓蒙主義的な意味あいをもつはずである。

このようなタヒチ社会の「革命」についてのゲオルクの考察は、おそらく父ラインホルト・フォルスターの洞察なしには生まれなかった、といえないだろうか。換言すれば、ラインホルトの著書『世界周航における観察』Observations made during a Voyage round the World (1778、ゲオルク・フォルスターによるドイツ語訳は1783年にベルリンで刊行されている) はゲオルクの『世界周航記』を考察するさい、つねに念頭におかれるべきであろう。ラインホルト・フォルスターも『観察』のなかで、タヒチの制度に言及し、その「統治形態はオリエント的な専制主義に近づいている[58]」、と指摘している。民衆のあいだに「奴隷の畏怖」がみられるからである。ラインホルト・フォルスターも、クックと同じく、啓蒙主義の信奉者である。タヒチの部族はたがいに敵視することをやめ、「大きな強大な国民」に統合せぬかぎり、「啓蒙主義の最高の頂点[59]」に達することはできない、とのべている。さらに注目すべきはラインホルト・フォルスターのヒューマニズムというべき精神である。ラインホルトはつぎのように記す。「無邪気な、こじんまりした国民は啓蒙されたヨーロッパ人にはいろんな点で遅れをとっている」が、「善良さと他人にやさしい好意[60]」においては、はるかにヨーロッパ人にまさる、と。

ラインホルト・フォルスターの役割については、かれの『レゾリューション号日誌』の編者であり、ラインホルトの伝記的研究である大著『機転のきかぬ哲学者[61]』の著者マイケル・E・ホーの指摘よりも、貴重な指摘をわたしは知らない。「20－25年間におよぶラインホルト・フォルスター研究から、わたしは根本的な確信を得ている」、とホーはいう。すなわち、「ゲオルクの新しい評価は、同時に、少なくともたんに表面的にではなく、ラインホルトと取り組むことなしには、根本的かつ議論の余地なく進められないであろう。[62]」

クックとラインホルト・フォルスターに関連する以上の考察からすれば、タヒチが「地上の残された、黄金の時代ではない」ことを「早くから徹底して」理解させたのは、ゲオルク・フォルスターである、[63]というヴーテノウの主張はいくぶんゲオルクに比重をかけすぎている感はぬぐえまい。それでは『世界周航記』におけるゲオルク・フォルスターの実像はどこにあるのだろうか。ヴーテノウがフォルスターの「タヒチの章」の精華とした「発見の魅力とそれと結び合わされたヨーロッパ批判[64]」はクックとフォルスター父子の共有するところではなかったか。

ゲオルク・フォルスターはふたたび訪れることなく、「官能の楽しみ」の島タヒチを去る。かれはタヒチの「幸福で単調な」生活様式には批判的であった。活動的な人間、たくさんの事物を知る人間

は「過去と未来の事象」に思いをめぐらすものだ。タヒチ人は「単純で、制約されている」einfach und eingeschränkt 人間である、と。しかし、タヒチ人に、そして自分自身に投げかけるフォルスターの最後の言葉はこうである。

> しかし至福について作りあげる観念は、異なった民族において、かれらの原則、文化、風習と同じように、非常にさまざまである。自然は世界のさまざまな地域において、その財産をあるときには惜しみなく、あるときには倹約して分配したのだ。そうであれば、幸福の概念の多様性は創造者の高貴な知恵と父の愛の確かな証拠である。創造者は全体の構想において、熱帯地方であれ、寒冷地方であれ、すべての被造物ひとりひとりの幸福を思いやったのである。[65]

ゲオルク・フォルスターの発展における『世界周航記』の意義はつぎのようにいえるであろう。上の言葉の原作者がたとえだれであろうと、若きゲオルクの頭と心に刻みつけられた、このコスモポリタン的思考はフランス革命にいたる時代の潮流のなかで、ゲオルク・フォルスターの「原則」に成長し、ついぞ消えることはなかった、と。それは1つの驚異とさえいえる。

注

フォルスターのテキストは下記の版（アカデミー版 Akademie-Ausgabe）を用いる。

Georg Forsters Werke. Sämtliche Schriften, Tagebücher, Briefe. Hrsg. von der Deutschen Akademie der Wissenschaften zu Berlin. Berlin (Akademie-Verlag) 1958ff. 以下、AA と略記する。たとえば、第2巻217ページは AA,Bd.2, S.217 と記す。

1）AA,Bd.9, S.1. なおアカデミー版の注釈によれば、この「ボルネオ旅行記」はフォルスターが父から借りていた、ビークマンのつぎの旅行記であろうという。Daniel Beeckman: A voyage to and from the island of Borneo in the Eastindies with the description of the said island. London 1718.(AA,Bd.9, S.388 を参照のこと)

2）Ansichten vom Niederrhein, von Brabant, Flandern, Holland, England und Frankreich, im April, Mai und Junius 1790. Von Georg Forster. Th.1-3. Berlin: Voß 1791-94. AA,Bd.9 に『観察考』第1、2部が、AA,Bd.12 に第3部が収められている —— オリジナルの刊行年は Th.1.1791, Th.2.1791[刊行されたのは1792], Th.3. (Hrsg. v .L.F.Huber) 1794.

3）Forster, Georg: Rundreise von Mainz aus 1790. In: AA,Bd.12.

4）参考までに、トーマス・グロッサーの以下の注釈を掲げておく。「フォルスターはしかし、この2つの資料だけに頼ったのではなく、旅行中に書きとめた印象を非常に綿密に点検している。その入念さを示す一例として、第2巻に仕上げられている『ブラバント革命』を引くことができよう。フォルスターはかれの出版業者フォスに、なぜ第2巻の原稿が印刷にまわせないかを、つぎのように説明している。『ぼくが言及せざるをえなかったブラバント革命が、もしきわめてばく大な時間をとらなかったら、第2巻はとっくにでき上がっていたはずです。ブラバント革命に関し、当時の公共の新聞・雑誌に (in öffentlichen Blättern) 書かれていた記事をすべて、あらかじめ通読し、ぼくがブリュッセル滞在中に書きつけた覚書と比較する作業はたいへん骨が折れました。』(AA,Bd.16, S.227)」(Grosser, Thomas : Forsters Ansichten vom Niederrhein. In : Weltbürger-Europäer-Deutscher-Franke. Georg Forster zum 200. Todestag. Hg. von Rolf Reichardt und Geneviève Roche. Universitätsbibliothek Mainz 1994, S.218.

5）Wuthenow, Ralph-Rainer: Die erfahrene Welt. Europäische Reiseliteratur im Zeitalter der Aufklärung. Frankfurt am Main(Insel Verlag) 1980, S.375.

6）Forster, Georg: Reise um die Welt während den Jahren 1772 bis 1775. Bd.1, 2. Berlin: Haude und Spener 1778, 1780. なお『世界周航記』のドイツ語版は AA,Bd.2, 3 に、英語版 (1777) は AA,Bd.1 に収められている。

7）この点に関しては、つぎの個所を参照することができる。Einführung zu "A Voyage round the World" und zur "Reise um die Welt". In: AA,Bd.4.; "Preface" der "Voyage". In: AA,Bd.1; "Vorrede" der "Reise". In: AA,Bd.2.

8）AA,Bd.2, S.217.

9) AA, Bd.3, S.88.

10) Wieland, C.M.: Auszüge aus Jacob Forsters Reise um die Welt, 1778. In: Ders.: Sämmtliche Werke [Reprint], Hamburg 1984, Bd. XIV, S.225.

11) Ebd., S.225.

12) Ebd., S.227f. を参照のこと。

13) Ebd., S.180.

14) Ebd., S.246.

15) ディドロ（浜田泰佑訳）：『ブーガンヴィル航海記補遺』（岩波文庫）1992、99ページ。この書は1772年に執筆されたという。

16) エドワード・W・サイード（今沢紀子訳）：『オリエンタリズム』上（平凡社ライブラリー）1996、280ページ。

17) 前掲書、21ページ。

18) 前掲書、40－41ページ。

19) Humboldt, Alexander von: Kosmos. In: Studienausgabe, hrsg. von Hanno Beck, Bd.7, Teilband 2. Darmstadt(Wissenschaftliche Buchgesellschaft) 1993, S.62.

20) スコット・ラッシュ(清水瑞久ほか訳)：『ポスト・モダニティの社会学』（法政大学出版局）1997、253ページを参照のこと。

21) Ueberschlag, Georges: Zwei Linné-Lehrjünger, Peter Forsskål und Pehr Kalm. Geisteswissenschaftliche Aspekte ihrer Forschungsreisen. In: Reiseliteratur im Umfeld der französischen Revolution, hrsg. von Thomas Höhle. Martin-Luther-Universität Halle-Wittenberg (Halle-Saale) 1987, S.122.

22) 西村三郎：『リンネとその使徒たち—探検博物学の夜明け』（朝日選書）1997、314ページ。

23) AA, Bd.2, S.72ff.

24) The Journals of Captain James Cook on his Voyages of Discovery. Vol.II, The Voyage of the Resolution and Adventure, 1772-1775. Ed. by J.C.Beaglehole, Cambridge (Published for the Hakluyt Society) 1969, S.48.

25) The Resolution Journal of Johann Reinhold Forster, 1772-1775. Vol. I. Ed. by Michael E. Hoare, London (The Hakluyt Society) 1982, S.181f.

26) AA, Bd.1, S.11.

27) AA, Bd.2, S.14.

28) Ebd., S.11.

29) AA, Bd.1, S.13.

30) ジョナサン・クレーリー（遠藤知巳訳）：『観察者の系譜—視覚空間の変容とモダニティ』（十月社）1997、21ページ；Jonathan Crary: Techniques of the Observer. On Vision and Modernity in the Nineteenth Century.(MIT Press paperback edition) Seventh printing, 1996, p.6 を参照のこと。

31) AA, Bd.10,1, S.600.

32) AA, Bd.9, S.127.

33) Steiner, Gerhard: Der junge Georg Forster in England. In: Weimarer Beiträge. Jg.5, 1959, S.531.

34) The Resolution Journal of Johann Reinhold Forster, 1772-1775. Vol. I. S.335.

35) Ebd., S.331.

36) Ebd., S.336.

37) AA, Bd.2, S.262.

38) Gordon, Joseph Stuart: Reinhold and Georg Forster in England, 1766-1780. Michigan (Xerox University Microfilms) 1975, S.239.

39) AA, Bd.2, S.285f.

40) Wuthenow, Ralph-Rainer: Vernunft und Republik. Bad Homburg v.d.H.・Berlin・Zürich (Verlag Gehlen) 1970, S.65.

41) AA, Bd.2, S.238.

42) The Resolution Journal of Johann Reinhold Forster, 1772-1775. Vol. II. Ed. by Michael E. Hoare, London (The Hakluyt Society) 1982, S.327f.

43) AA, Bd.2, S.298.

44) Joppien, Rüdiger: Georg Forster und William Hodges — Zeugnisse einer gemeinsamen Reise um die Welt. In: Georg Forster in interdisziplinärer Perspektive. Hg. von Claus-Volker Klenke. Berlin (Akademie Verlag) 1994, S.101.

45) AA, Bd.2, S.278f.

46) AA, Bd.5, S.297.

47) クック(増田義郎訳):『太平洋探検』上 (17・18世紀大旅行記叢書 3、岩波書店) 1992、127ページ; The Journals of Captain James Cook on his Voyages of Discovery. Vol. I, The Voyage of the Endeavour, 1768-1771. Ed. by J.C.Beaglehole, Cambridge (Published for the Hakluyt Society) 1968, S.123 を参照のこと。

48) AA, Bd.2, S.300.

49) AA, Bd.1, S.12.

50) The Journals of Captain James Cook on his Voyages of Discovery. Vol. I, The Voyage of the Endeavour, 1768-1771. S.ccxlii ff.

51) クック(増田義郎訳):『太平洋探検』下 (17・18世紀大旅行記叢書 4、岩波書店) 1994、62ページ; The Journals of Captain James Cook on his Voyages of Discovery. Vol. II, The Voyage of the Resolution and Adventure, 1772-1775. Ed. by J.C.Beaglehole, Cambridge (Published for the Hakluyt Society) 1969, S.175 を参照のこと。

52) AA, Bd.2, S.254.

53) Wuthenow, Ralph-Rainer: Die erfahrene Welt. S.235.

54) The Journals of Captain James Cook on his Voyages of Discovery. Vol. II, The Voyage of the Resolution and the Adventure, 1772-1775. S.294.

55) Cook der Entdecker — Schriften über James Cook von Georg Forster und Georg Christoph Lichtenberg. Hg., mit Nachwort und Anmerkungen von Klaus-Georg Popp. Leipzig (Verlag Philipp Reclam) 1980, S.226.

56) AA, Bd.2, S.300.

57) AA, Bd.3, S.75.

58) Forster, Johann Reinhold: Beobachtungen während der Cookschen Weltumsegelung 1772-1775. Übers. von Georg Forster. Hrsg. von Hanno Beck (> Quellen und Forschungen zur Geschichte der Geographie und der Reisen <, Bd.13) Stuttgart(Brockhaus Antiquarium) 1981, S.329.

59) Ebd., S.332.

60) Ebd., S.305.

61) Hoare, Michael E.: The Tactless Philosopher: Johann Reinhold Forster(1729-1798). Melbourne(Hawthorne Press) 1976.

62) Hoare, Michael E.: Die beiden Forster und die pazifische Wissenschaft. In: Georg Forster in interdisziplinärer Perspektive. S.33.

63) Wuthenow, Ralph-Rainer: Die erfahrene Welt. S.211.

64) Ebd., S.259.

65) AA, Bd.3, S.90.